

幕末期における西洋リンゴ苗木の渡来、およびその弘前藩 浪岡村への移植説をめぐる検証

境 博成

東京農業大学・生物産業学部・食品香粧学科

〒099-2493 北海道網走市八坂196

Introduction of Apple-trees into Japan and Commentaries on Stories of Their Transplantation to Namioka-mura at the End of Edo-era

Hiroshige SAKAI

Department of Food and Cosmetic Science, Faculty of Bioindustry

Tokyo University of Agriculture

198 Yasaka, Abashiri-shi, Hokkaido, 099-2423 Japan

Summary

Based on the evidential diary and a letter written by vassals of two feudal clans, Kaga-Han and Fukui-Han, the first introduction of apple-trees into Japan is supposed to have been in 1854 accompanied the second visit of Admiral Perry.

In relation to this introduction, a following story has been existing in some local books: a few of these apple-trees were gifted to a Buddhist through Zojo-ji, a temple which was seemed to play important rules for the translation of American documents into Japanese, and were transplanted in a village of a feudal clan, Hirosaki-Han.

According to the diplomatic documents between Japan and America and old records of Zojo-ji at the end of Edo-era, evidences of 'important rules for the translation' and descriptions of 'gift of apple-trees' connecting with Zojo-ji have not found yet.

Therefore, it is suggested that the story is a rumored one holding no historical facts.

明治時代初期まで我国に植栽されていたリンゴは和りんご (*Malus asiatica*) の呼称で知られている中国原産の品種である。果径が3-4 cm程度で小さく、糖度も少なかったことから、それまで果物の主要な座を占めていた柑橘類、柿、梨および葡萄などに比べると人気がなく、植栽も小規模で消費地域も限定されていた¹⁾。

リンゴ栽培が現在のような隆盛を見るようになったのは幕末期に西洋リンゴ (*M. pumila* var. *domestica* あるいは *M. domestica*) の苗木が渡来し、やがて明治政府の殖産政策でその繁殖や輸入が図られ、栽培が拡大した明治中期以降になってからのことである。

苗木の渡来は日米開国交渉が始まった幕末の頃から始まった。本稿では最初の苗木の渡来と考えられる嘉永7年(1854)の渡来事情について考察し、その苗木の一部

が弘前藩の浪岡村に移植されたという説について検証したい。

西洋リンゴ苗木の渡来

我国に西洋リンゴ苗木が渡来した事実を裏付ける最も古い資料は、加賀藩(金沢藩)の江戸屋敷に勤務した小川仙之助が遺した「御参勤御供中日記」に見られる記述である²⁾。安政2年(1855)11月24日の条に、

‘去春亜墨利加渡来之アツフル、木作足軽へ御渡植付被仰付候所出来仕候ニ付、上之申候所御奥ニ而〇程之餅之上へアツフルをぬり被食候様ニ被仰付候旨ニ而御側廻りへ頂戴被仰付候’

とあり、昨年(1854)の春にアメリカから渡来したアツフル(アッ

プル)を果樹園芸担当の足輕に植栽させたところ実を付けた。屋敷の方が餅の上に塗って食べてみるようにと言われ、お側の人たちが頂戴した、と記されている。

‘昨年の春’、とは嘉永7年(1854)の春で、ペリー提督が前年に続いて2回目に来航した年である。この春に約3週間の交渉を経て日米和親条約が締結された。ペリーが幕府に蒸気機関車の模型や電信機を贈呈したことはよく知られているが³、種々の野菜や草花の種子も贈られた⁴。物品目録は見つかっていないがその中にリング苗木数本が含まれていて、一部が加賀藩主の前田齊泰なりやすに渡され下屋敷に植栽されたものと考えられる。

小川仙之助の日記は江戸在勤中に見聞した様々な体験を記述したものである。その内容には誇張が見られず、創作であるとも思われないことから、11月24日の条は西洋リングの渡来を裏付ける十分な資料であると考えられる。

安政3年(1856)7月に総領事ハリスが下田に着任し、翌年の秋から日米和親条約を補足する条文が検討され始めた。安政5年6月によく日米修好条約が締結され、同7年(1860)1月には条約を批准するため新見豊前守一行が米国を訪れた。幕府使節は種々の土産物を持ち帰ったがその中に、

‘おびたしい農業関係のものがあり、その中の林檎の苗木を幕府は御三家はじめ関係諸家に賜った。その中の水戸家の薬草園(今日の小石川植物園)に植えたものに実がなった。これが日本の最初の林檎だそうである。’

という記述が「明治アメリカ物語」に見える⁵。この記述を実証する資料は見つかっていない。「物語」の著者も日本最初のリングは‘ペリー来航の時くれたのだとも、幕府使節の持ち帰った土産物の中にあつたもののだともいうが’と断りを入れていることから、明治期の東京に漂っていた伝聞や風聞に基づく記述であろう。

一方、安政6年(1859)に福井藩の巢鴨下屋敷に西洋リングが植栽されていたことを裏付ける資料が残っている。旧藩士の鈴木準道が後年になってから下屋敷を訪れた時の様子を述懐した記録である⁴。

‘安政六年三月二初メ而江戸表相詰被申付…(中略)…古詰之者ニ同行、夜巢鴨下屋敷へ罷越御庭等拝見候節、未三・四疋御庭ニ遊びおり、所々拝見候内庭番之人これハ西洋林檎之木申聞候事ハ予之耳ニ留居

も、実も無之聴流しニ致候…’

鈴木が江戸に詰めた安政6年3月に古詰めの人と巢鴨の下屋敷へ行き、庭などを拝見した。羊が2、3匹遊んでいた。庭番がこれは西洋林檎の木だと言ったことを耳に留めたが、実がなかったので聞き流した、という回想である。

新見豊前守の批准使節が訪米し、植物種子等を持ち帰ったと言われるのはその翌年であることから、鈴木が見た‘西洋林檎之木’はペリーの再来航の時に、前述した加賀藩江戸屋敷の‘アップル’と同じ時期に渡来した苗木であると考えられる。

福井藩巢鴨下屋敷の‘西洋林檎之木’を広く世に紹介したのは田中芳男で、明治の半ばを過ぎた頃であった。田中は伊藤圭介に本草学を学び、伊藤に随伴して横浜でシーボルトに会い、文久2年(1862)に蕃書調所物産学出役となった英才である。明治14年(1881)の農商務省設置のときは初代農務局長を務め、大日本農会や大日本水産会の創設に尽力した。明治29年(1896)、青森県八戸町を訪れたときに請われて、

‘(前略)アップルの我邦へ伝ハルノ初ハ文久年間ニ在ルニ大ニ繁殖ヲ図リシハ開拓使及ヒ勸農寮ノカニヨル即明治八、九年の頃ナリシ’

と揮毫した⁶。田中は自らの体験に基づいて、西洋リングの我国への渡来は文久年間(1861-64)であると確信していた。大正2年(1913)5月、76才になった記念講演会では次のように述べている⁶。

‘今言ふ平(苹)果であります、平果アップルの樹があるからそれを接ひだら宜しからうと云ふことで、其樹は巢鴨の越前家に植ゑてあるから其樹枝を貰って林檎(和林檎)若しくは海棠を台木として接いだのが慶応2年の春であります、

越前公はさういふことは分かつた方であつたから、外国より取寄せられたに違ひない、夫ゆへ御本国にも平果アップルの樹があつて実が成つたといふことでありました、江戸にも越前にも両方に平果の樹があつたので私が見たのは、一間ばかりの樹でありまして凡二三十あつたのを切つて接いだ、それが日本に平果樹を接いだ初めであります、

明治になつて実が成りましたが、其樹は何処かに散乱して仕舞つた、此巢鴨の越前家の邸は私は深く存じませぬが、あすこは、羊を飼つた邸で綿羊屋敷と称へて居つた、ところが火事に遭つて綿羊が皆焼け

て仕舞つた、其焼けた綿羊を埋めたからして、今でも掘れば羊の骨が出て来るといふことであります、其邸に平果樹が植ゑてありました、・・(中略)・・慶応三年十月に亜米利加から平果の各種を沢山送つて来ました、其果実は見た所もよく味も良いので人々は驚きました、こんなものが世の中にあるのかと言つて珍しがつた、其目録が残つて居らないのは遺憾に存することであり、

この講演にある‘平果’は正しくは‘苹果’で、西洋リンゴと我国に在来する林檎(和りんご)を区別するために田中が用いた用語である。苹果は食用リンゴを示す中国の呼称で、‘林檎’もまた平安時代に漢籍に書かれた文字として中国から渡来した用語である⁷⁾。

田中は越前公(松平慶永^{よしなが}、号は春嶽)の勧めで、巢鴨邸からリンゴ樹枝を貰い、慶応2年の春に接木した。20-30本あったのを切って接いだ。明治になって実がなったが、それらの木は何処かに散乱してしまつた、と述懐している。

この講演内容に関連して、慶応初年の巢鴨邸にリンゴ樹があったことを裏付ける書簡も見つかっている。かつて巢鴨邸に勤務した岩屋政の書簡⁴⁾で、

‘慶応元丑ノ四月巢鴨御守拜命、該地へ転生致候処、則ち西洋林檎苗と申事ニ而苗木数百株植付有之たれとも誰一人倍(培)養二心を委する者無之、云は、植放之姿ニて大なる苗は五尺位ニしてまた枝も振らす苗ニ依りて二三寸位なる木札へ洋字認、針金を以て棹ニ結付たる物も数々認候、・・’

と書かれたものである。慶応1年(1865)4月、巢鴨の御守を命ぜられて当地に転勤したら、西洋林檎苗数百株が植え付けられていた。だれも栽培する者が無く、植え放しの状態であった。苗の木札には洋文字が書かれていた、という内容で、前述した旧福井藩士の鈴木準道が後年になって下屋敷の西洋林檎の状況を岩屋政に問い合わせた際の返信である。

鈴木が下屋敷で初めて‘西洋林檎之木’を見たのは安政6年(1859)である。それから万延・文久・元治の時代を経て6年後の慶応1年には、‘数百株の林檎樹’が荒れた状態で存在していた。その間にリンゴ樹が大量に増加したのは、どのような事情によるものであろうか。

福井藩主の松平春嶽は幕府と意見が対立して水戸藩の徳川齊昭らと共に隠居謹慎を命ぜられていた。謹慎を解

かれ一挙に幕府の政事総裁職(大老)に就任したのは文久2年である。春嶽は珍しい外国の物産に興味を持ち、様々な殖産興業策を進めていた⁴⁸⁾。横浜に表向きは石川生糸店という交易場を設け、外国と交易をしていたようである⁸⁾(図1)。



図1. 福井藩の交易場(表向きは石川生糸店)
(富士田「リンゴの歩んだ道」⁸⁾より)

洋書調所(旧蕃書調所)の田中芳男との出会いも、西洋の動植物に対する春嶽の好奇心にあったと思われる。西洋リンゴの最初の渡来に関して、一部に‘文久2年’の春嶽による輸入説があるのは、上に述べた背景によるものである。

安政7年(1860)に修好条約批准のため幕府使節が訪米した後、幕府関係の使節が再び訪米したのはそれから11年後の明治4年(1871)である。その間の文久年間(1861-64)や慶応年間(1865-67)に春嶽が‘洋文字の木札がついた数百株の西洋リンゴ苗木’を米国から輸入したとすれば、それは民間取引によるものである。

ハリスが来日した時期にはすでに捕鯨船を相手にした食糧・雑貨船が太平洋を遊弋し、箱館や下田には交易を目的とした商船が出入りしていた^{9,10)}。しかし春嶽が関わったと思われるリンゴなどの果樹苗木や野菜種苗、巢鴨下屋敷で飼われていたという綿羊などの家畜の輸入については資料に乏しく、実情は明らかになっていない。

冒頭で紹介したようにペリー再来航のときに渡来したと考えられる加賀藩の‘アップル’の記事が世に表れた

に送付してきたのである。どういう風の吹きまわしかすぐ翻訳して老中へ送った。その訳者の一人が忍阿大雲上人であった。一八五八年米国と通商条約の条文は増上寺の忍阿大雲上人によって、翻訳されて通商条約が結ばれました。喜んだのはハリス公使（注：総領事）である。リンゴ苗木三本を御札の印として直接増上寺へ送ってきた。

その時信徒である奥羽浪岡の御本陣平野清左衛門が参詣に来ていたのでその苗木を増上寺からいただいて郷里に移植津軽リンゴの草分けとなった一と昭和四十五年三月に東京の新聞にのせられた。’

この記事では、ハリスが交渉に当たった日米通商条約の条文を‘忍阿大雲上人が翻訳した’とされ、‘家定公へリンゴ苗木三本贈呈’に加え、さらに‘ハリスのリンゴ苗木三本’も増上寺に送ってきた、となっている。その苗木を浪岡本陣の‘平野清左衛門’がいただいて郷里に移植した、となっている。

平野清蔵は明治44年、江戸時代後期に浪岡村で庄屋を務めた平野家に連なる家系に生まれた¹⁶。平野家は弘前藩主の領内巡見や湯治旅の休憩、宿泊の宿（本陣）にも供せられ、明治2年に箱館戦争で降伏した榎本武揚が東京に護送された時、宿舎ともなった浪岡村の旧家である¹²。

清蔵が寄稿した2つの記事は祖父慶太郎からの伝聞に基づくもので、資料は明治末期の火災で全て失われたという。この記事が印刷された年には祖父はすでに亡くなっている。祖父の伝聞に基づいてリンゴの由来を述べた2つの記事に、微妙な相違があるのは何故なのだろうか。

「浄土宗新聞」の‘リンゴの渡来’が世に出てから18年後、「商工浪岡」が発行されてから10年後の昭和60年（1985）にこれらの記事内容によく似た逸話が浄土宗寺院婦人会の会誌「微風」（10月発行）に掲載された¹⁷。婦人会の中央研修会で茨城教区専修寺住職の村上博了が和宮の生涯について講演したとき、余談として触れた増上寺が絡むリンゴと津軽の信徒の話である。

‘安政年間にハリスという人がアメリカの国書を幕府に提出しました。当時の幕府には天文方というのがあって、オランダ語とポルトガル語は出来たが英語はわからない。そこで老中が寄って相談した結果、こういうときこそ、日頃目をかけてやっている増上寺に訳させようじゃないかということになって、増上寺に持ってきた。当時の増上寺は日本第一の学府

なのです。・（中略）・

それが訳せないということになれば増上寺の面目丸潰れ、徳川家の菩提寺どころではない。大変なことになったというので大騒ぎしていたら、忍阿さんという学者が、「なんじゃそんなこと、わけないじゃないか、こちらへ持って来なさい」とスラスラ訳して「ハイかくの通り」、さっそく幕府に持って行けば、幕府も喜び、又ハリスも喜んだ。そこでハリスから翌日お礼の使者が三本のリンゴの苗木を持ってきた。・（中略）・

増上寺はリンゴの苗木を貰ってもどうしていいかわからない、困ってしまった。そこへたまたま津軽浪岡の御本陣で平野という人がお詣りにおいでになった。その当時の記録を見ますと、平野さんは先祖の供養に五百両を持って増上寺にやって来たとあります。そしてその話を聞き、「これが噂に聞いているリンゴの苗木ですか。これはひとつ私にお任せ下さい」ということで、浪岡へ持って帰って作るようになった、これが日本のリンゴの発端なんです。’

村上の逸話には‘ヒマラヤ山中の霊果’、‘忍阿’、‘御本陣’、‘参詣（お詣り）’、‘三本のリンゴ苗木’など、平野が投稿した「浄土宗新聞」や「商工浪岡」の記事に共通した語彙が多く見られ、大意もほぼ同一であることから、村上逸話の出典は平野記事であると断定せざるを得ない。

村上は増上寺の文書、記録の調査や年表の編纂、文化財の管理保存に係った僧侶であった¹⁹。従って彼が語った上の逸話は増上寺資料に基づいているものと思われるが、しかし次項で指摘するいくつかの誤謬を含んでおり、この逸話は真面目な講演を聞いて凝固しつつある聴衆の心を和らげるための、根拠のない息抜き話としてとらえるべきであろう。

最後にこの逸話を浪岡町に広く紹介した人物が登場する。会誌「微風」を読んだ同町の成田良治は逸話の部分（上に紹介した全文）を抜粋して‘浪岡はりんご渡来、最初の地’と題し、平成2年に地元農協の広報紙に投稿した¹⁸（図3）。

その冒頭に‘津軽浪岡御本陣平野清助氏 米国ハリス持参のりんご苗木三本 江戸芝の増上寺を通して譲渡される 増上寺古文書より’とあるが、勿論そのような古文書は未発見である。正確に言えば‘平野清助’は本陣の分家であり¹⁶、‘ハリス持参のリンゴ’も次項で検証するように誤謬である可能性が高い。

浪岡は りんご渡来、

ら寄せられたお手紙に書かれていたもので、それによると「りんご渡来最初の地は浪岡である」と記されている。平野清助氏とは今の平野精一毛で、江戸芝の増上寺は東京都港区芝公園にあります。以下、成田さんからのお手紙を紹介する。

「りんごはいつ頃、日本に入ったと思いますか。これは昭和十七年に増上寺の古文書、古記録約五万点を全部調査したところ、その中に、安政年間（一八五四年～一八五九年）にハリス（アメリカ総領事）という人がアメリカの国書を幕府に提出しました。当時の幕府には天文方というのがあって、オランダ語とポルトガル語は出来たが、英語はわからない。しかし、わからないといつては諸外国に対して恥かしい。そこで老中が寄っ

いということになれば増上寺の面目潰れ、徳川家の菩提寺どころではない。大変なことになったというので大騒ぎしていたら、忍阿さんという学者が「なんじゃそんなこと、わけないじゃないか、こちらへ持って来なさい」とスラスラと訳して「ハイかくの通り、さっそく幕府へ持って行けば、幕府も喜び又ハリスも喜んだ。そこでハリスから翌日お礼の使者が三本のリンゴの苗を持って来た。「これはリンゴと申しまして、あらゆる病気のときでも頂くことが出来る。これは又盛果とも申しまして、人間幸福の基を開く、インドの聖果であります」と。増上寺はリンゴの苗を買ってもどうしていいかわからない、困ってしまった。そこでまたま津軽浪岡の御本陣で平野という人がお詣りにお

図3. 「農協広場」に掲載された成田記事
(農協広場・第153号¹⁸より)

国書の翻訳、増上寺、忍阿、および 西洋リンゴ苗木をめぐる検証

平野の「浄土宗新聞」、「商工浪岡」の記事と村上の「講演録」に共通するいくつかの誤謬について検証したい。

その1は、「国書が増上寺によって翻訳された」という誤解である。嘉永6年（1853）ペリーが持参したフィルモア大統領の国書の正本は漢文で書かれていた²⁰。内容が日本側に正しく伝わるように意図されたもので、それにオランダ文と英文の副本が付けられていた。漢文の正本は来航途中のマカオで、漢文と日本語に明るい現地在住の米国人宣教師によって翻訳されたものである²¹。

ペリーから受け取った漢文の正本を和訳したのは幕府から交渉の全権を委任された林復斉（大学頭）で、副本のオランダ文は箕作阮甫と杉田成郷らが和訳した^{22,23,26}。林は漢籍に造詣が深く、昌平坂学問所の塾頭を務めた高級官吏で、箕作と杉田は共にオランダ語を解する蘭方医であり、杉田成郷は杉田玄白の孫である。

「幕末外国関係文書」に英文の和解（翻訳）は含まれて

いない²⁰。漢文正本とオランダ文副本の和訳で十分に国書の内容が理解できたからである。

言うまでもなく外交文書は、その内容の解釈に齟齬を生じないように一字一句に注意が払われ、何通りかの関係諸国の言語で作成される。林大学頭はそれまでに幕府と外国の間で交わされた全ての外交文書を整理する仕事にも従事しており、その博識もあって交渉の全権を委任された。ちなみに翌年春に締結された日米和親条約の条文は英文とそのオランダ文和解、漢文、和文の4か国語で書かれている³。

一方、ハリスが総領事として日本を訪れたのはペリー来航の3年後、安政3年（1856）の夏である。持参したピアース大統領の国書は英文の正本にオランダ文副本が添えられたもので、オランダ語通訳も同行した⁹。

英文の正本は手塚律蔵、西周助（周）、森山吉郎（栄之助）、伊藤貫齊らが、オランダ文の副本は川本幸民、高島五郎、津田新一郎らがハリスの宿所に充てられた蕃書調所で翻訳作業に当たった。やがて締結することになる修好条約の案文もここで練られている^{3,9,22}。

蕃書調所は洋学の研究や洋書の翻訳、オランダ語や英語の教育などが行われ、やがて東京帝国大学へと変貌していった幕府の文教施設である。幕末の日本を代表する多くの秀英がここに詰めていた。

下田、箱館に続く開港地や通貨の交換比率などの案文を巡って、ハリスと幕府の全権を委任された下田奉行の井上清直きよなお、目付岩瀬忠震ただなりとの論争の様子や、それに関わった通詞（通訳）の名前は成書^{9,25}に詳しいのでここでは触れない。日米修好条約は翌年初夏に締結されたが、その条文は蕃書調所の英才達によって練られ、和文、英文、オランダ文で記述されたものであった。

日米交渉や条文作成の経緯を調べると、そこに増上寺の学僧が加わる余地は全くないことが判る。

その2は、忍阿は国書翻訳に関わったことはなく、英語の素養もなかったのではないかと推測されることである。増上寺には三千人を越える学僧がいて青年期の忍阿もその一人であった。彼らは十八壇林と呼ばれる数か所の学問所で学んでいたが、そこでは英語やオランダ語などの外国語は一切教授されていない¹⁹。

忍阿（得誉忍阿、号は的門）は増上寺で修学したのち天保元年（1830）に京に上り、幾つかの寺で修業したのち大雲院住持となった。説法が得意で、江戸末期から明

治初期にかけて浄土宗の布教家として過ごした僧侶であったという^{26,27}。仏教関係の辞典で紹介されている忍阿の記述はいずれも簡素であり、幕末外国交渉史にも増上寺史にも全く姿を見せない。

平野清蔵の脳裏にあった忍阿は、祖父に説法を受けたかもしれない忍阿か、あるいは全国行脚で平野家に宿泊した可能性もある忍阿の名前であろうと想像される。

その3は、ハリスがリンゴ苗木を持ち込んだ可能性は極めて低いと考えられることである。下田に上陸したハリスは江戸で将軍に面会するまでの1年3ヶ月を玉泉寺で過ごした。その間、折々に幕府要職に贈ったシャンパン、ブランデー、ポンス、短銃などの物品や日々の行動、購入品やその出費などを細かく日記に書きこんだ。

リンゴ苗木を持ち込んだとすれば、それを幕府に渡すまで玉泉寺の寺庭に仮植し、養育しなければならない。その作業を想わせるような記述は「ハリス日記」にも、通訳の「ヒュースケン日本滞在記」にも見られない^{9,25}。玉泉寺資料にもリンゴ苗木仮植、その伝聞の類の記録は全く見あたらず^{10,28}、下田市史の幕末開国編にも記載がない²⁹。

前項でふれた村上博了は「増上寺史」¹⁹の著者であった。「寺史」にはペリーの来航の項に2ページを費やしているが、増上寺が関与した件として述べられているのは、

1. 海岸防備資金三千五百両を幕府に献金した
2. 護国殿と安国殿で天下静謐を祈願した

の2点だけである。ペリー提督の国書を忍阿が翻訳し、日米交渉の通詞を学僧が務めたのであれば、この一件こそ増上寺にとっては「寺史」に力を込めて記述し、後世に伝え続けなければならない重要事項ではないか。

以上の考察から国書の翻訳や条約の案文作成等に増上寺が、そして忍阿が関係した可能性は極めて低く、「浄土宗新聞」と「商工浪岡」に投稿した平野の記事と、それを基にして話したと思われる村上の逸話の一部は誤謬であると結論せざるを得ない。

「大本山増上寺史・年表編」ではペリーとハリスの関連項目として次の4項が記載されている³⁰。

1. 嘉永6年(1853)6月9日、幕府、増上寺慧巖に異国船渡来により世上静謐の祈祷料白銀百枚を賜う(慎徳院殿御実記)。

(注：ペリー提督が率いる4隻の東インド艦隊は6

月3日に横須賀村千駄ヶ崎沖に投錨した)

2. 安政4年(1857)10月7日、松平輝聴てるとし、増上寺に末寺数カ寺をアメリカ使節宿舎に宛あてしむ。序ついでで増上寺役者、西久保大養寺・麴町栖岸寺・牛込法正寺・小石川西岸寺・浅草源空寺を指定す(役所日鑑)。

(注：ハリス総領事が日米修好通商条約の案文交渉の為に江戸に入った時、寺社奉行の松平輝聴は警護の下田奉行一行約300人の宿舎として増上寺の末寺をあてた)

3. 同年11月1日、幕府、アメリカ使節提出書簡和解の返事は増上寺を通じてなすべきことを同使節に通知す(温恭院殿御実記、役所日鑑)。
4. 同年12月12日、幕府、増上寺安国殿にアメリカ人帰帆の祈祷をせしむ(月番日鑑)。

上記の11月1日の条に「アメリカ使節提出書簡和解の返事は増上寺を通じてなすべきこと」という注目すべき記述がある。この日付はハリスが将軍家定に国書を渡した(10月21日)後で、幕府と新条約の交渉を始めようとしていた頃である。

すでに述べたように国書の和解(翻訳)に増上寺は関与していない。ハリスが江戸に滞在中、生活や小旅行などの要望やその許可は幕府との間で文書で交わされていた^{9,25}。アメリカ使節提出書簡とはその類の書簡であると思われ、それらの書簡がもたらすかも知れない災いを怖れ、その返事は仏の加護を求めて増上寺を経由して渡したのではないだろうか。

増上寺とリンゴ樹の接点は一度だけ歴史に表れる。明治5年(1872)に来日した北海道開拓使の技術顧問・ケブロンは米国から持ち込んだ蔬菜や果樹を一時的に開拓使の圃場に仮植した。その圃場は増上寺の一角に仮設されたもので、果樹のなかにリンゴ樹があったことである⁶。

さらに想像を逞しくすれば上の2.にあるように、将軍家定と会見するハリスを江戸まで警護した下田奉行所一行の宿所として増上寺の末寺があてられた。その返礼として幕府が増上寺にリンゴ苗木(ペリー再来航時の苗木)を贈った可能性も排除できない。

リンゴは浄土宗信徒によって全国に広まったのではない。勸業寮の殖産政策のもとで北海道開拓使の試植に始まり、新規経済果樹として栽培が奨励されて明治8年(1875)から全国に試植苗木が配布された。栽培者の努力

もあったが、気候風土が適合して今日の隆盛を見たのが青森県であった、ということである。

増上寺に保存されている古文書、古記録は約5万点あると言われるが¹⁷、印刷・公表されたのはその一部であるという。今後印刷されると思われる増上寺の役所日鑑や月番日鑑に‘リング三本、信徒の平野に贈る’の記録を見つけるまでは、平野説は巷説の扱いを続けざるを得ないであろう。

もうひとつの平野説—松平春嶽の 苗木輸入と田中芳男の接木

平野清蔵は「浄土宗新聞」に‘増上寺に贈られた西洋リングを浪岡村へ移植’したという説を寄稿する12年前に、その内容とは全く異なる‘松平春嶽が輸入した西洋リングの枝を田中芳男が接木した。その苗木を先祖が買い求め、浪岡村に植栽した’とする説を「黒石民報」に寄稿していた。昭和35年(1960)に掲載された次の記事である⁶。

‘津軽には珍しい果物が無いので慶太郎はお殿様御本陣へ宿泊の際捧げる果物の苗木欲しいので、江戸市中の植木屋を尋ねたところ仏の功德か徳川將軍の親藩松平春嶽公が文久二年米国からりんご苗木を取寄せ巢鴨の別邸に植えた。

その樹枝を慶応二年、日本農業の先覚者田中芳男氏が海どうに嫁接した苗木が江戸の植木屋にあったので、その苗木二本を買い求めた。その苗木を御本陣庭園の門のそばに一本、池のそばに一本植えたのが、そもそも津軽りんごの初めでした。’

この記事内容もまた祖父の慶太郎から聞いた話に基づくものであるという。明治44年生まれの子清蔵が松平春嶽や田中芳男の名前、さらに文久2年や慶応2年の年代までも祖父から聞いて記憶していた、とすれば、話を聞いた時期は少なくとも物事の分別が判る少年期から青年期にかけての、大正の終わりから昭和の初めの頃ということになる。清蔵の父、秀七は昭和3年に没した¹⁶。祖父・慶太郎は本当にその頃まで生き続けたのだろうか。

接木技術はすでに平安時代頃から行われていた繁殖技術である¹。幕末期の巢鴨村には多くの植木職人がいて楓、躑躅^{つばき}、桜、梅などの園芸樹木の繁殖が行われていた。職人は江戸周辺に広く分布し、増上寺近辺の青山や芝にも植木屋があった³¹。

最初の項で紹介した巢鴨邸の岩屋の書簡では、慶応年代に植えられていた数百株の西洋リングは‘だれも栽培する者が無く、植え放しの状態’であったという。その枝を植木職人が入手して苗木に仕上げ、それを増上寺詣でをした慶太郎が購入した可能性は充分考えられる。

田中芳男が巢鴨別邸から穂木を切り出し、開成所(前洋書調所、旧蕃書調所)で海棠に接木したのは慶応2年の春で、この史実は「新撰日本物産年表」(明治34年発行)に記載されて世に紹介された⁴。慶太郎や幕末期の植木職人達は、松平春嶽の名前は知っていたとしても‘田中芳男’の名前や‘文久2年’、‘慶応2年’の年代までを知っていたとは考え難い。

ちなみに春嶽が米国からりんご苗木を輸入したとされる年を‘文久2年’と最初に記述したのは清蔵である。苗木を輸入した年は未だ特定されておらず、田中芳男が述懐したように‘文久年間’が正しい。‘文久2年’は春嶽が幕府の政事総裁職に就任した年で、清蔵の推測に基づくものである。

昭和44年(1969)6月、松平春嶽の地元、福井県で春嶽を‘リングの父’と讃える次の記事が「毎日新聞」福井版に掲載された⁴。

‘春嶽公が幕府の総裁職をしていた文久二年、アメリカからリングの苗木を取寄せ江戸の別邸に植えた。…(中略)…これより前の安政元年、日米和親条約記念として徳川幕府におくられたのがはじめてだが、本格的に栽培を手がけたのは春嶽公だった。春嶽公はその後、青森県の津軽地方がリングの栽培に適していることを見抜き、津軽藩にリング栽培をすすめ苗木を贈った。’

記事の中に‘平野リング園’の記載が見られ、同じ内容を報じた「サンケイ新聞」福井版の副題には‘青森の農園から手紙届く’とある。疑いもなく平野清蔵が両新聞社に送った手紙が基になって報じられた記事である。

「福井市政週報」にも‘リングはいつから日本に—松平春嶽の大てがら’と題して同じ内容が紹介され⁴、翌年に発刊された「新修福井市史」にも掲載された³²。

清蔵が推測で書いた‘文久二年’は検証されないまま次々に引用され、いつの間にか史実となった。「市史」の刊行後に出版された「近代日本食文化年表」³³、「日本果物史年表」³⁴、「江戸の食品」³⁵、「日本の食文化史年表」³⁶などにも、‘文久2年、越前福井藩松平慶永がアメリカか

らリンゴ苗木を輸入して江戸巢鴨の別邸に植える」と記載されている。繰り返すが、正しくは「文久年間」である。

青森県においては明治18年頃からリンゴ園が急速に拡大した。栽培技術書の発行や品評会の開催を通して栽培技術が広まった。明治29年には田中芳男が来県し、栽培家に彼の名前が知れ渡った。昭和の時代には「林檎日報」や「りんご協会報」で技術情報と共にリンゴの歴史文化情報も広く県下に流布された⁵。「黒石民報」の記事はそのような背景の中で書かれたものである。記事には清蔵が祖父から聞いた記憶と共に、彼自身が吸収した記憶も溶け込み融合しているのではないだろうか。

この項の初めに述べた「黒石民報」の記事によると、津軽リンゴの初めは、「慶太郎が江戸の植木屋で買い求めた二本の苗木」であったのに、のちに投稿した「浄土宗新聞」や「商工浪岡」では、「清左衛門が増上寺から贈られた三本の苗木」に変わっている。この変化をどのように解釈すればいいのだろうか。さらに平野は冒頭の「黒石民報」の記述に、次の内容も書き加えている⁶。

‘明治六年に旧浪岡御本陣の庭園の西洋リンゴが九年目で結実し、晩秋初霜が降るころ採取し、お殿様伯爵津軽承昭公に献じたところ、御礼状と仏壇のウツシキを賜ったが、不幸にして明治四十四年四月二十八日の深夜に火災が起り全焼したので焼失してしまった。’

勤業寮の殖産政策で西洋リンゴが初めて青森県に入ったのは明治8年である。その3年後に弘前町の山野井宅のリンゴが実を付け、青森県最初のリンゴ結実として「北斗新聞」で報じられた⁶。それ以前の明治6年に「門のそばに一本、池のそばに一本植えた」リンゴが結実し、お殿様に献上したのであれば少なくとも浪岡村の噂にはなりそうである。平野家の資料は焼失したとしても伝聞や風聞として周辺に残っていてもいいと思われるが、そのような言い伝えは全くない。

しかし平野の伝聞は全てが虚構であるとは思えない。「これより前の安政元年（嘉永7年）、日米和親条約記念として徳川幕府におくられたのがはじめてだが」と、本稿の最初の項で記述したように事実と考えられる内容も含まれているからである。

前項で検証したように幕末期の浪岡村への西洋リンゴ苗木の移植説に関して、「増上寺」、「ハリス」、「忍阿」の

関与は極めて低いと考えられるが、「門のそばに一本、池のそばに一本植えた」リンゴについては傍証資料が見当たらず、検証は不可能である。

浪岡町旧家の古文書や弘前藩史料の中に眠っているかも知れない関係資料の今後の発掘を期待したい。

要旨

西洋リンゴ苗木が我国に初めて渡来したのは嘉永7年（1854）の春で、日米和親条約の締結のため横浜に再来航したペリー提督が幕府への贈答品として持ち込んだものであると考えられる。このことは最近発見された加賀藩士・小川仙之助の日記と福井藩士・鈴木準道の記録で裏付けられた。

その数本がハリスの国書を翻訳したとされる増上寺に贈られ、信徒を經由して弘前藩浪岡村に移植されたという説がある。しかし幕末外交史や増上寺資料、さらに下田・玉泉寺の資料を検討すると、増上寺が国書の翻訳に関与した事実やハリスがリンゴ苗木を持ち込んだ傍証はうかがえず、この説は伝聞や誤解に基づく巷説であることが強く示唆された。

謝辞

本稿に引用した「浄土宗新聞」と「寺庭婦人会会誌・微風」は、浄土宗文化局（東京）および浄土宗教学局（京都）の御厚意によって入手した。黒石市・對馬省次氏には浪岡町の平野家に関連する情報を、さらに下田市・玉泉寺と静岡市・田形一貴氏にはハリス関係資料の提供をいただいた。稿を終えるに当たって上記の方々に衷心より感謝の意を表したい。

引用文献

1. 境博成：我国への林檎（和林檎）の渡来と江戸時代までの植栽事情、ESD・環境教育研究、Vol. 17（1）（2015）
2. 吉田政博：時代を紡ぐ、広報いたばし平成21年3月21日号、広報いたばし平成20年度PDF版、東京（2009）
3. 石井孝：日本開国史、吉川弘文館、東京（2010）
4. 柳沢美美子：福井藩巢鴨下屋敷のリンゴをめぐる、福井県文書館研究紀要7、福井（2010）
5. 木村毅：明治アメリカ物語、東京書籍、東京（1979）

6. 波多江久吉・斎藤康司編：青森県りんご百年史、青森県りんご対策協議会、青森（1977）
7. 境博成・王鵬：林檎・柰・頻婆・苹果－中国と日本におけるリンゴ果実の呼称の変遷、ESD・環境教育研究、Vol. 13（1）（2011）
8. 富士田金輔：リンゴの歩んだ道、農山漁村文化協会、東京（2012）
9. 坂田精一訳：ハリス日本滞在記（中）・（下）、岩波書店、東京（1954）
10. 村上文樹：開国史蹟・玉泉寺、玉泉寺ハリス記念館、下田（2008）
11. 青森県庁内のりんご、青森県庁ホームページ、www.pref.aomori.lg.jp/
12. 浪岡町史編纂委員会：浪岡町史・第三巻、青森県南津軽郡浪岡町（2005）
13. 浪岡りんごの歴史、JR 浪岡駅に併設の浪岡交流センター展示史料
14. 平野清蔵：投稿・リンゴの渡来、浄土宗新聞・第10号、昭和42年9月10日発行、東京（1967）
15. 平野清蔵：日本リンゴのあゆみ、商工浪岡・昭和50年10月1日号、浪岡商工会議所、青森県南津軽郡浪岡町（1975）
16. 青森県人名事典編さん室：青森県人名大辞典、東奥日報社、青森（1969）
17. 村上博了：「静寛院和宮」の映画に寄せて、寺庭婦人会会誌・微風・第18号、浄土宗宗務庁、京都（1985）
18. 成田良治：浪岡はりんご渡来、最初の地、農協広場・8月号、浪岡農業協同組合、青森県南津軽郡浪岡町（1990）
19. 村上博了：増上寺史、大本山増上寺、東京（1974）
20. 東京大学史料編纂所編：大日本古文書 幕末外国関係文書1、東京大学出版会、東京（1972）
21. 黒船来航、[//ja.wikipedia.org/wiki/ 黒船来航](http://ja.wikipedia.org/wiki/黒船来航)
22. 和親条約と開国、
www.japanusencounters.net/amitytreaty.html
23. 張厚泉：「難民」とフィルモア大統領国書の翻訳、
[//ricas.joc.u-tokyo.ac.jp/asj/html/065.html](http://ricas.joc.u-tokyo.ac.jp/asj/html/065.html)
24. 洋学博覧漫筆、広報つやま No.682・2月号、津山（2011）
25. 青木枝朗訳：ヒュースケン日本日記、岩波書店、東京（1989）
26. 市古貞次監修：国書人名辞典第3巻、岩波書店、東京（1996）
27. 浄土宗大辞典編纂委員会：浄土宗大辞典・第3巻、山喜房仏書林、東京（1974）
28. 岡田光夫：幕末の玉泉寺、玉泉寺ハリス記念館、下田（2001）
29. 下田市史編纂委員会：下田市史・資料編三、下田市教育委員会、下田（1992）
30. 増上寺編：大本山増上寺史・年表編、大本山増上寺、東京（1999）
31. 江戸の植木屋、園遊舎主人のブログ、
[//blogs.yahoo.co.jp/koichiro1945/18623760.htm/](http://blogs.yahoo.co.jp/koichiro1945/18623760.htm/)
32. 福井市史編さん委員会：新修福井市史1、福井市、福井（1970）
33. 小菅桂子：近代日本食文化年表、雄山閣、東京（1997）
34. 梶浦一郎：日本果物史年表、養賢堂、東京（2008）
35. 田中千博：江戸の食品（16）、明日の食品産業2000・10、食品産業センター、東京（2000）
36. 江原絢子・東四柳祥子編：日本の食文化史年表、吉川弘文館、東京（2011）